

木もれ日通信

戸越八幡神社一箱古本市通信 第4便

第4便は今年の一箱古本市についてお知らせします!!

ブログ <https://togoshihitohaka.com/>
発行：戸越八幡神社一箱古本市実行委員会

2021年戸越八幡神社一箱古本市 10月2日(土)に開催します!

今年の一箱古本市の日程が決まりました!

- 日程：2021年10月2日(土)雨天の場合3日(日)に延期
- 場所：戸越八幡神社の境内にて
- 店主の募集：8月頃予定
- 募集の方法：ブログや twitter にてお知らせします

毎年同時開催している「一部屋豆本市」は今年はお休みです。
新型コロナウイルスや神社の改修工事の状況により、規模の縮小や中止とする場合もあります。
今年は5回目。みなさまに境内でお会いできることを楽しみにしています。
もしかしたら・・・10月よりも前に、**ゲリラ的にミニ一箱古本市を開催するかも**しれません。
ブログや twitter で随時お知らせしますのでぜひチェックしてください!



こころに残る街・本×実行委員

今回は実行委員のこころに残る街について、そしてその街にちょっと関係する本について書きたいと思います!

ルーマニア ブカレストにて

2011年の夏の夜に、私はルーマニアのアンリ・コアンダ国際空港に降り立った。

空港からタクシーで街中へ出て初めて会ったのは犬だった。首都ブカレストの街は狼ばりの犬がよく歩いている。

ルーマニアにはインターンで来たので、翌日からは毎日会社に行った。滞在した2ヶ月で大した仕事はしなかったけど、出会った人々は面白くて独特で、ブカレストの街の記憶は出会った人々(と、野良犬)とともにある。

所々新しいガラスのカーテンウォールのビルが点々としていたり、雑居ビルが立っていたりするけど、街全体、建物はどれもかなり古い印象で、会社も例に漏れず重厚な建物であった。

入社早々、会社のトイレに便座がなくて、「トイレは絶対に座ってはダメ。空気椅子よ!」と言われて驚いた。

毎日、懐かしのデスクトップPCでのんびり仕事をしていても退屈なので、色んな人の仕事部屋を覗きに行っては暖かく迎えてもらった。

ある日ノックしてとある部屋に入ると、研究員のお姉さんとお兄さんがイチャイチャしていたり、ある部屋ではなぜか泣いているおばちゃんが慰められていたり、ある部屋では優雅にお茶していたり、真面目に仕事をしている人はほぼいなかったような気がする……。一緒にお昼を食べていると“なぜ日本のアニメはエロいのか?”ということを純粋に質問されてたじろいだ。

ブカレストの美しい旧市街は、夜はバーやクラブから吐き出される若者が通りでワイワイしている。オフィス街や住宅街の側道にはどこも所狭しと車が並び、建物の壁には革命の時の銃痕が生々しい場所もよくある。

1989年にチャウシェスクの独裁政権が崩壊するまで、ルーマニアは共産主義の国だった。ブカレストでは大統領派と革命派の市街戦になり、当時の痕跡が今も街中に多く残る。

あの会社で出会った人たちは今も、私の感覚とは少しずれた暮らしをあの街で送っているのだろう。

ドナウの旅人

宮本 輝 著 新潮文庫 1988年

ドナウデルタに訪れたときのことはよく覚えている。

ドナウ川の最河口・ルーマニア最東端の町スリナへは船に乗っていくしかなくて、その船の中で小さな女の子の名前を平仮名で書いてあげたらすごく喜んでもらえた。スリナでは一緒に行った友人たちと民家の一部屋で一晩丸くなって眠らせてもらい、翌朝船着場でドナウデルタを遊覧すべく金額交渉して廻った。

交渉が成立したおじさんに小さな船を漕いでもらって見たドナウ川の河口は、ひたすら長い芦が群生し、水鳥がたくさん群れている自然豊かな場所だったが、そこが長いドナウ川の河口で黒海に流れ込む場所だとはあまり想像ができなくて、帰国してからインターネットで上空写真を見て初めて実感が湧いたのだった。

ドナウ川はドイツの水源から8カ国を通して黒海に流れ込む、約 3,000m の川である。この小説は、その長い川路を水源の町から河口の町まで旅をする母娘の話だ。

夫との離婚を決意してドナウ川沿いを旅する決意をした絹子とその母を追ってヨーロッパへ渡った麻沙子。母はどんな思いで旅を決意し、旅を続けるのか。

物語の終盤、一行はブルガリアのソフィアからルーマニアのブカレストを経てドナウ川の河口の町スリナへ入る。

そこでどのような結末を迎えるのか・・・。

なかなか海外へ足を運ぶことができない今、ドナウ川沿いの国々を一行と共に旅してはどうだろうか。



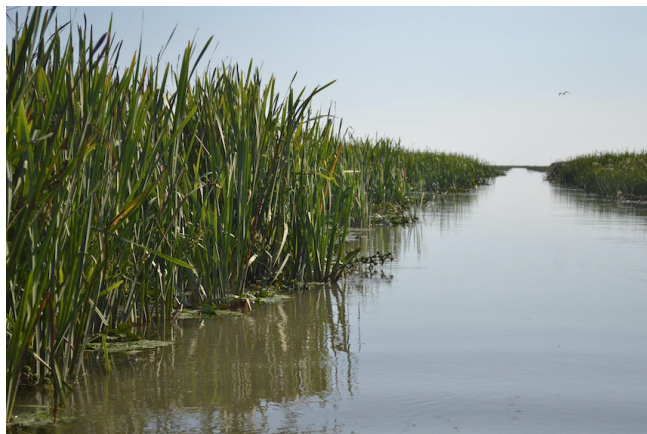
地元の桜

地元の桜のこととなると、私は少し暑苦しい。ニュースで桜の開花状況を報じ始めれば、地元で桜の名所として知られる公園の開花状況をネットで検索し始める。と言ってもその公園が目当てというわけでもない。目当ては、実家の住宅街にある桜並木だ。その公園が満開なら実家の近くも満開だ。カレンダーとにらめっこして、この日しかないという日に毎年地元に戻る。どうしても帰れなかった年は、酒の席とは言え人前で号泣するぐらいだから面倒くさい。

その桜並木は、実家の前を通る道の少し先にあり、春になれば日に日に桜色が濃くなっていくふんわりとした塊が家の前から見える。道の両側に桜があり距離も 100 メートルほどあるため、満開時は桜のトンネルようになる。なんの変哲もない桜並木だけど、それなりに立派なものだと勝手に思っている。

小学校から大学までは登校しながら、社会人になってからは出勤しながら、毎日眺め続けてきた。春が近づけばその色づく様を、満開になれば運転もおろそかに上を見上げ、散り始めれば桜吹雪の中を、散り終われば桜の絨毯の上を、新緑の季節になればその緑に目を奪われながら。

なぜそんなにと思うのだけれど、あの桜並木が好きなのだとしか言いようがない。地元にいる頃からそうだから、地元を離れてからはなおさらだ。連絡せずに突然帰っても、今日ぐらいに帰ってくると思ったと笑う母に、父と家に、桜に、ただいまと言う。



空飛ぶ馬

北村 薫 著 東京創元社 1994年

主人公である「私」は女子大生だ。これはシリーズ本の一作目だが、シリーズが進む中で彼女は、家から隣の市の女子高に通っていたと言い、同じ市内に男子校もあると言った。そして、男子校はすぐ前に駅があるのに女子高の方は延々と歩いてやっと着くなんておかしいでしょう、と言うのだ。この部分を読んだ時の私は、慌てて著者紹介の頁を手繰った。それは、私が高校生の時に思っていたことと寸分違わないものだった。

他にも、「私」は自分が住む町の図書館よりも高校のある市の図書館を利用し、その隣のデパートで映画を観たり、同じく隣の文化会館にも足を運んでいる。私もその図書館に寄ったし、文化会館は高校の行事で行った。私が子供の頃は、両親はお中元やお歳暮はそのデパートに買いに行ったものだ。はっきりと名前が出てくるわけではない。それでも私は、「私」と知り合いのような気がしてくる。そのまちなには、似たように過ごす女子が確かにいた。

国文科の女子大生の「私」と落語家の円紫師匠が、日常の謎を解いていく「円紫さんと私シリーズ」で、いわゆる「日常の謎」ミステリーの先駆けで知られている。同時に「私」の成長小説でもあり、謎解きだけでは終わらないそちらの魅力も大きい。

殺人事件が起きるわけでもないのに、日常に潜むぞっとするような人の暗い部分を描いてみせながら、通底に流れているのはどこまでも優しい人の心だ。探偵役でもあり人生の先輩でもある円紫師匠が「私」にくれる言葉と、それを受けとる「私」。読む頁のふとした隙間に、自分が感じていた将来への不安が言語化されていたり、それを励ますような優しい言葉が添えられている。

ケトル VOL.41 北の国からが大好き

太田出版 2018年

数年前に帰省した際に札幌駅の書店で購入した雑誌。

「北の国から」の歴史や登場人物の紹介のほか、名言集なども。ドラマを見たことがある方もない方も、どちらの方にもおすすめです。

北の国をおもう

高校生の頃、地元の街で「北の国から」のロケが行われていた。小さい街なので情報が伝わるのは早く、通っていた高校ではその話題で持ちきりだった。

生まれ育った街は峠を挟んで富良野方面に隣り合っていたことから、ドラマで映し出される風景は地元のそれと一緒に、取り立てて興味をひくものではなかった。まだ子供だったこともあり作中の人間模様などにも感情移入できず、中でも登場人物の北海道弁の発音に微妙な違和感があり今ひとつ馴染むことができなかった。

先日、テレビで「北の国から」を見る機会があった。

出てくる風景がいちいち懐かしかった。登場人物たちのなまりも耳に心地いい。子どもの頃は理解できなかった、大人たちの情けないところやカッコ悪いところも今見るとぐっと胸に来るものがある。大人になったからなのか北海道から離れて住むようになったからなのか、どちらなのだろうと考える。

社会人になった頃、帰省の折りにふらっと「五郎の家」に寄って見たことがある。ドラマの記憶もおぼろげで、石で出来た家などの建物がシンプルに面白いなというぐらいの印象だったのだが、ここ最近ドラマを見返す中で、また訪れてみたいと思うようになった。

これらの建物も今実際に見ると以前とは違った印象を持つのだろうか。色々と落ち着いたらまたふらっと行ってみたい。

